

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	岩 崎 眞 和
2. 審査委員	主 査：（上越教育大学教授） 五十嵐 透子 副主査：（鳴門教育大学教授） 葛西 真記子 委 員：（上越教育大学教授） 林 泰成 委 員：（兵庫教育大学准教授） 中村 菜々子 委 員：（上越教育大学准教授） 森口 佑介
3. 論文題目	青年期の感謝と自己の発達に関する実証的研究
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻 学校教育臨床連合講座 岩崎眞和 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記の通り審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成27年2月9日（月） 午前10時から11時</p> <p>場所：上越教育大学 人文棟7階 生徒指導・心理臨床共用会議室（人702）</p> <p><b>1) 学位論文の構成と概要</b>            本論文は、以下に示す5章から構成されている。</p> <p>第1章 感謝研究の動向と課題            第1節 感謝に関する心理学的研究の変遷            第2節 国内外の感謝研究の動向            第3節 自己の発達            第4節 感謝の定義と概念図</p> <p>第2章 本研究の目的と方法            第1節 目的            第2節 方法</p> <p>第3章 青年期用感謝尺度の開発            第1節 青年期用感謝尺度の開発（研究1）            第2節 青年期用感謝尺度の信頼性と妥当性の検証（研究2）            第3節 青年期用感謝尺度の因子的妥当性と再検査信頼性の検証（研究3）            第4節 本章のまとめ</p> <p>第4章 青年期の感謝と自己の発達および精神的健康との関連            第1節 青年期の感謝と自己愛的脆弱性の関連の検証（研究4）</p>

## 第2節 青年期の感謝と甘えおよび精神的健康との関連の検証（研究5）

### 第3節 本章のまとめ

## 第5章 総合的考察

### 第1節 本研究の成果と総括

### 第2節 本研究の課題と展望

### 第3節 要約

各章ごとの論文概要は、以下に示す通りである。

第1章 本論文の主概念である感謝に関する心理学的研究の変遷に関する包括的なレビューが行われた。心理学以外では文化を問わず、哲学や文学、教育学、宗教学などさまざまな領域において感謝は論じられ、日々の生活で体験するポジティブ感情の1つに位置づけられてきた。研究として発展されにくかった要因とポジティブ心理学の影響を欧米と日本国内に分けて概観し、現状と課題を論じた。加えて、感謝と主要な関連を示すことが考えられ実証的に検討が求められる自己の発達を主我と客我の2側面からのとらえ方、認知社会心理学的理解の自己スキーマ、社会文化的自己観の視点および精神分析的理解も含めている。本論文は、研究1・2・3・4・5の5研究からなり、総括と展望で構成されている。

第2章 本研究の目的として第1に、第1章で明らかになった日本文化に適した感謝測定の課題に対し、認知・感情・行動の3側面を含んだ物質的や人的受け取りだけでなく実存感も含んだ操作的定義に基づき多角尺度開発を行った。特に、日本人特有の負債感を含め、セルフ・アイデンティティの発達とその後の成長に影響をおよぼす青年期を対象とした尺度としている。第2の目的に、開発された感謝尺度を用いて、感謝と自己の成熟度との関連を明らかにし、日本人の感謝に関する実証的知見を蓄積し、日常生活での感謝体験促進への理解を深める必要性に焦点を当てられている。

第3章 国内外で開発されている感謝尺度の比較検討から共通する諸課題を抽出し、日本人青年の感謝の包括的測定に適した多因子構造からなる“青年期用感謝尺度（Japanese Adolescent Appreciation Scale）”を開発した。大学生を対象に7因子構造（実存・享受・返礼・比較・負債感・忘恩・喪失）が得られ、研究2で信頼性および妥当性を検討した。さらに、研究3では本尺度の因子的妥当性と再検査信頼性を検証し、信頼性（ $\alpha = .62 - .88$ ； $\rho = .45 - .83$ ）の再確認をしている。これらにより、日本人青年の感謝体験の包括的測定が本尺度で可能であることが示された。

第4章 感謝の実証的検証のために、研究4では自己の未熟さを表わす自己愛的脆弱性との関連を検証し、女性よりも男性において自己愛的脆弱性傾向と感謝の関連が強く、男女ともに負債感と忘恩および自己愛的脆弱性の3つの下位因子と正の影響が示された。研究5では、さらに甘えと精神的健康との関連を検証し、実存・享受・返礼・比較および喪失の下位因子と健康的な甘え、忘恩と屈折した甘えとは正の関連を示す結果を得て、感謝と自己の成熟度との関連が明らかにされた。加えて、主観的幸福感と抑うつ傾向の2側面の精神的健康も下位因子ごとに異なる関連が示され、既存の結果と本研究の仮説を支持する結果が示された。

第5章 総合考察として、まず日本人青年の感謝を多角的に測定する“青年期用感謝尺度”のそれぞれの下位因子の特徴を検討し、今後の使用年齢を含めた展望を行っている。特に、青年期における“実存”体験、下方比較となりやすい“比較”、日本文化に特徴的な“負債感”、そして文化を問わず望ましくないとされる“忘恩”などへの社会文化的および精神分析的視点から、日本人青年の感謝の特徴が考察されている。加えて、感謝と喪失体験の関連において東日本大震災の影響も検討し、臨床心理学的援助に感謝を取り入れる有用性も研究目的に添って行われている。さらに、感謝と自己の関係を自己愛と甘えの視点に加え、精神的健康との関連を深めることで、感謝の抱きやすさや感謝体験を質量ともに高める教育領域における展望も論じられている。

## 2) 審査経過

### (1) 研究目的の妥当性および研究目的と論文作成の整合性

本研究は、人がよりその人らしく、より健康的な生活を送ることに深く関与すると考えられる感謝を、認知・感情・行動の多面的に検討し、社会文化的影響も網羅した尺度開発と、関連要因の検証を課題としていた。包括的に研究の背景と課題の提起を行い、尺度開発の手続き、尺度の信頼性および妥当性の検討、関連要因との検討におけるデータ収集と分析、結果に対する考察は、いずれも論理的に行われていた。研究テーマの着眼から導き出された研究目的は妥当であり、論文全体を通し、目的を明らかにする論文構成であった。

### (2) 研究方法

研究1での国内外で開発されている感謝尺度とwell-beingの包括的なレビューと詳細な検討に基づき、日本人青年を対象とした独自の尺度を開発し（研究1）、信頼性と妥当性を2回検討している（研究2・3）。研究4・5では、感謝と自己の成長の仮説検証として、自己愛的脆弱性、甘え、精神的健康との関連を検証し、感謝の下位因子ごとにそれぞれとの関連を分析検討しているプロセスも、客観的かつ論理的であった。

### (3) 学位論文としての独創性および発展性

感謝は、文化を問わずさまざまな領域でとりあげられてきた概念であるが、本研究は、人の精神的健康やヘルス・プロモーションと臨床心理学的援助に感謝を位置づけ、感謝と自己の発達との関連の理論的な指摘を、日本人青年期用の尺度開発のもと実証的研究で明らかにしたところに高い独創性を評価した。特に、社会文化的視点を取り入れ、負債感と喪失を含めて多角的に検討を行った点も、臨床心理学だけでなく教育領域において今後の発展性につながるものが高く期待されるものである。加えて、セルフ・アイデンティティの確立が発達課題となり、その後の生活にも大きな影響をおよぼす青年期を対象とし、測定年齢幅を中学生から成人前期までを測定可能としている点でも独自性が高い。

## 3) 審査結果

以上により、本審査委員会は、岩崎真和の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。